流星群

流星群

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15820217

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, アバン, 子ヒュン, 子マァム

ツイッター上で突発的に発生したヒュンマサマフェス合わせ。突貫工事のように作成。夏っぽさは・・・あるのか？
「あるべき未来に進むために」の「７」novel/15406332「８」novel/15621709を前提にし、さらに、「村のくらし」novel/15411188にもつながる話ではありますが、これのみでも読めるようにはしてあります。ラストダンジョン突入前の場面、また、最終回から数年後の場面あり。
表紙は、霞雪さんuser/3403063にお借りしました。まさに、ネイル村の星空のようで素敵です。

2021年のペルセウス座流星群は、極大前に少しだけ見られました。

2021.11.3　シリーズ組み換え。

Table of Contents

- 流星群

流星群

　まだ、ヒュンケルがアバンと旅をしていたときのことだった。
　その頃彼らが滞在していたネイル村で、アバンが、流星を見ようと声をかけ、深夜に、村の広場に子どもたちを集めたことがあった。
　その夜、村の子どもたちと、アバンの呼びかけに関心を持った数名の大人たちが広場に集まり、思い思いに地面の上に寝ころんだ。
　その日は夏の盛りの夜で、昼間のうだるような暑さはなりを潜め、心地よい風が広場を吹き抜けていた。
　まだ８歳のヒュンケルは、村の子どもたちに混じって、広場でごろりと寝ころんでいた。
　この日は、雲もなく、月の月齢も低かったため、星の明かりがよく見えた。
　南西の空には、星屑をちりばめたようなミルキーウェイが、天の頂に向かって広がっており、その両脇には、ひときわ強く輝く一等星がいくつも見て取れた。
　北の空には、旅人には欠かせない、標を示すポールスター。
　夜空の観察を妨げる明かりもないネイル村から眺める夜空は、それ自体が宝箱のような、満天の星空であった。
　吸い込まれそうな夜空を眺めながら、ヒュンケルは、亡き父を思った。
　まだ彼が地底魔城にあった頃、ヒュンケルは、父バルトスとともに、夜空を見に行ったことがあった。
　地底魔城は、その名のとおり、地下に作られた城ではあったが、闘技場や閲兵広場など、空が見えるところは複数あった。ヒュンケルは、バルトスに連れられて、そこから空を見たことは何度もあった。
　ただ、やはり昼間よりも夜の方が目立たなかったため、ヒュンケルは、青空よりも、星空を見に行くことの方が多かった。
　父と見上げた夜空に輝く星々。
　父が読んでくれた絵本も、星の絵本だった。

そして、ヒュンケルが父に贈った星のペンダント。
彼にとって、星の思い出は、バルトスと強く結びついていた。
以前は、夜空が好きだったのかもしれない。だからよく、父は彼に星を見せてくれたのだろう。
だが、今となっては、ヒュンケルにとっては、その思い出たちは、悲しみで彩られていた。
夜空の何を見ても、父を思い出す。
吸い込まれそうな漆黒の闇に浮かぶ星々の中に、亡き父の姿を見たような気がして、ヒュンケルは泣きたくなった。
そうしているうちに、すっと、星が流れた。
流星だ。
それはまるで、彼の代わりに天が流した涙のようであった。
ひとつ星が流れると、子どもたちの間から歓声が上がった。
そして、また少しすると、もうひとつ、すっと星が流れた。
「しゅごーい！」
彼の隣で寝っ転がっていた、まだ３歳のマァムが、声を上げた。
ふと見ると、彼女の目は、星々に負けなくらい、きらきらと期待に輝き、その声も喜色に満ちていた。
また、すっと、空を掃くように星が落ちた。
マァムはさらに歓声を上げ、興奮した様子で立ち上がった。
両手を天に向けて掲げ、きゃあきゃあと嬉しそうに声を上げて喜んでいた。
ヒュンケルは苦笑した。
「マァム、ほら、寝っ転がっておけって、先生が言ってただろう。」
ヒュンケルは、マァムの手を引いた。
「はーい。」
マァムは、自分の手を引いたヒュンケルを見下ろすと、素直に、地面にごろりと寝ころんだ。
空を見上げたマァムの目に、また流星が映った。
時間を追うごとに流星の数は増えていき、すうっっと、西に落ちたかと思えば、東に落ちる。マァムは、そのたびに流星を目で追い、感嘆の声を上げていた。

「しゅごーい、きれーい！」
　まだ舌足らずの口で、何度も歓声を上げるマァムを、ヒュンケルは、苦笑しながらも微笑ましく思い、穏やかな眼差しで見つめていた。
　そうしていると、ヒュンケルの隣に、誰かが腰を下ろした。ヒュンケルは見上げた。アバンだ。
アバンは大地に座ったまま、空を見上げていた。彼は、その両腕の中に、オレンジ色のアンデッドモンスター、ゴーストを抱きかかえていた。１年ほど前からの、彼らの旅の同伴者だった。
　アバンは、いつもどおりの穏やかな声色で、ヒュンケルに声をかけた。
「見えますか？きれいですよね。」
「ええ・・・。」
　ヒュンケルは、愛想もなく、曖昧に返事をした。
　だが、アバンは、それを気にもせずに、空を見上げたまま、いつもと同じようにヒュンケルに語り掛けた。
「星がたくさん流れているでしょう？一晩でこんなに流星が見られる日は、１年の間でもそう多くはありません。
　流星群って言うんですよ。」
　ヒュンケルは、その説明には言葉を返さなかった。
　しばらく、沈黙が続いた。
　ただ、アバンに聞いてみたい疑問があったようで、やがて、ヒュンケルは、おずおずとアバンに尋ねた。
「・・・先生。」
「何ですか、ヒュンケル。」
「先生は、この日に、その流星群があるって、わかっていたんですか？」
「いい質問ですね。グッドですよ。」
「茶化さないでください。」
「茶化していません。ちゃんと答えますよ。
　私も、流星群の起きる日はわかりません。専門的な学者なら、計算で出せるみたいですけどね。」
　その言葉に、ヒュンケルが驚いたように声を上げた。

「計算で？」
　アバンは、穏やかな声色のまま少年に答えた。
「そう。
　面白いですよね。紙の上の数字と数式で、天の動きがわかるんですよ。しかも、これから先の星の動きまでわかるんだそうです。何も知らない我々から見たら、それはもう、神の所業ですよね。」
　そう言って、アバンは穏やかに微笑んだ。彼の知的好奇心は深い。そして、弟子であるヒュンケルが同じような好奇心を抱くことを喜んでいるようであった。
　アバンは、言葉をつづけた。
「夏の盛りに、流星群が起きるということは、書物で読んだことがありました。実際に、何年か前の夏の夜に、流星群を見たこともありましたね。
　たまたま昨日の夜、私が夜中に起きたときに空を見たら、星が流れたんですよ。それで、流星群のことを思い出しましてね。急いで、ロモスの図書館まで行って調べてきました。そうしたら、今晩も見られそうだってわかったんです。
　どうせなら、あなたたちに見せてあげたいと思いましてね・・・。」
　そう言って、アバンは、座ったまま、東の空を指さした。
「この流星群は、全天から降ってくるように見えますが、書物によると、あちらの東の方角から流れてくるそうです。その流星群の源には、戦士の星があるそうです。」
「戦士の星・・・。」
「伝説の勇敢な戦士の物語が、その星にはあるそうですよ。」
　アバンは、それだけ言うと、口を閉ざした。
　ヒュンケルは、東の空に視線を定めた。
西から続くミルキーウェイが、東の空まで帯にように広がっていた。
　その東の空の低い位置に、明るく輝く二等星がいくつか見える。あれが戦士の星なのだろうか。
　戦士、という言葉は、否応なく、ヒュンケルに父を思い出させた。よりいっそう、亡き父を思う。そして、いまここに彼がいない

ことを強く思い知らされ、寂寥の念が沸き起こる。
　ヒュンケルの意識が想い出に沈みかけたとき、また隣で歓声が上がった。次々と流れる星を見て、マァムが立ち上がって両手を天に伸ばし、大きくその手を振っていた。じっとしていることができなくなったようで、マァムは、その場で何度も飛び跳ねていた。
「しゅごいねっ、にいに！」
　マァムは、興奮した様子で、ヒュンケルを見下ろし、彼に呼びかけた。
　３歳のマァムには、ヒュンケルの名前は発音できない。だから、年上の彼のことを「にいに」と呼ぶ。始めはくすぐったかったが、ネイル村に滞在して１か月以上が経った今では、ヒュンケルもその呼ばれ方に慣れていた。
　マァムの様子に、アバンが苦笑して声をかけた。
「マァム、暗いから、飛び跳ねると危ないですよ。」
「ほーら、言われただろ。せめて座ってろって。」
　ヒュンケルは上半身を起こすと、また、マァムの腕を引っ張って、座らせようとした。
　すると、アバンは、今度はヒュンケルに声をかけた。
「まぁ、小さい子にじっとしていろって言うのは無理ですからね・・・。
　ヒュンケル、あなた、マァムをだっこしててくれませんか？」
「俺がですか？」
「ほら、こんなふうに。」
　アバンは、自分が抱きかかえているゴーストのバケルをヒュンケルに示した。いつもはいたずらばかりしているバケルが、この日は、アバンの腕の中にすっぽりと納まってくつろいでいた。大きな口を開けて、あくびまでしている。
　アバンは、ヒュンケルの許可を得る前に、マァムに呼びかけた。
「マァム、危ないから、ヒュンケルの膝に乗っててくださいね。」
「はーい。」
　幼いマァムは、そう言うと、遠慮なく、ヒュンケルの膝に乗ってきた。仕方なく、ヒュンケルはマァムを抱きかかえた。
　背後からヒュンケルに抱きかかえられたマァムは、精いっぱい顔

を上に向け、空を見上げた。満天の星空から、まるで、抱えきれない宝石がこぼれてきたように、星が落ちてくる。
「しゅごいっ！きれーい！」
　マァムが素直に喜んでいる。
　抱きかかえた小さな体は、柔らかくて温かかった。
　マァムは、振り返ると、ヒュンケルを見上げて微笑んだ。
「きれいね、にいに。」
「そうだな・・・。」
　ヒュンケルの口から、自然と、そんな言葉がこぼれた。
　空から流れる星の数は、いよいよその勢いを増してきた。子どもたちだけでなく、空を見上げた大人たちの間からも感嘆の声が漏れていた。
　だが、空を見上げているうちに、幼い子どもたちは、だんだん疲れてきたようだった。
　ヒュンケルが抱きかかえていたマァムの体が、次第に温かさを増し、重くなってきた。
　ふと、腕の中を見ると、マァムが何度もまばたきをしていた。目は開いているが、どこも見ていないような様子で、じっとしている。様子を見ていると、そのうち、大きなあくびをひとつ、した。
「あ、寝ちゃいましたね。」
　ヒュンケルの隣で、アバンが柔らかな視線をマァムに向けていた。
　マァムは、ヒュンケルに抱きかかえられたまま、彼の腕の中で寝息を立てていた。その重みが、温かさが、強く彼の記憶に刻まれる。
　骨と石と涙に彩られた夜空の記憶に、ほんの少し、異なる色が加わった。

　大魔王との再戦を明日に控え、マァムは、砦内に与えられた自室のベッドで体を横たえていた。
　明日の作戦は過酷だ。
　まず、処刑場で、ヒュンケルとクロコダイン、二人を救出し、ヒュンケルを加えた上で、大破邪呪文を完成させなければならな

い。そして、大魔王の宮殿に乗り込み、大魔王を倒す。当然、敵幹部も黙ってはいない。
　これまで彼女が立ち向かってきた中でも、最も過酷で、かつ、勝算の低い戦いが予想された。
　だが、マァムの心を占めているのは、明日の作戦への不安ではなかった。
　敵に捕らわれたままの兄弟子と獣王。
　彼らは無事なのか。
　処刑は明日なのだから、命はあるのだろう。だが、捕虜である彼らが、ましてや、魔王軍から見れば裏切り者である彼らが、敵軍の中で、適切な待遇を受けているとは思えなかった。
　そして、さらに彼女の心を乱しているのは、風の賢者エイミの突然の告白だった。
　エイミがヒュンケルを愛している。男性として。
　考えたこともないことを突然、打ち明けられ、マァムの心は千々に乱れた。
　動揺した彼女は、信頼できるおとうと弟子に相談したが、けんもほろろにあしらわれ、自分で自分の心の乱れに向き合うしかなかった。
　どうしてこんなに気になるのだろう。
　ヒュンケルを愛している人がいるというのは、むしろ喜ばしいことのはずだ。人間社会を敵に回した彼を理解し、受け入れてくれる人が現れたということなのだから。
　しかし、マァムには、そうは考えられなかった。
　自分が何に動揺しているのかもわからず、マァムは、ベッドの上で、まんじりともできずに寝返りを打った。
　ふと、ベッドから天窓の外の空が見えた。この砦には、ガラス窓が使われていた。
　厚いガラスを通して見えたのは、雲もなく、澄み渡った漆黒の空だった。その墨のような夜空に、金に輝く星々がきらめいている。
　マァムは、その光に魅かれるように、砦の外へと歩み出た。

　砦の外は、森に囲まれており、人工的な明かりは何もなかった。

その分、空の輝きがよく見え、まるで手が届きそうなところまで星たちが下りてきているようであった。
　マァムは、まっすぐに夜空の星々を見上げながら、自問した。捕らわれの兄弟子を思う。
—私は、彼に何を望んでいるのだろう・・・。
　マァムは、ヒュンケルと出会ってからの出来事を順に思い返した。
　初めて会ったころの彼は、敵で、やり場のない怒りと憎しみをたぎらせた目をしていた。しかし、それにもかかわらず、彼はどこか悲しげで、寂しげで、マァムは彼に寄り添いたいと思ったのだ。
　それが始まりだった。
　その後、一緒に戦うようになり、彼は常に最前列で、最も強敵を引き受け、自らの体を盾にして仲間たちを助けて戦っていた。体を張ってかばってもらったことも何度もある。
　アバンの使徒の長兄と呼ばれるようになり、周囲からも信頼され、頼られるようになったけれども、彼はいつも、どこか寂し気で、他の仲間から一線を引いているように見えた。
　天の星は、マァムに問いかける。
　お前は何を望むのか、と。
　マァムは己の内に問いかける。
　自分は何を望んでいるのか、と。
ずっと思っていた。
　彼の悲しみが、少しでも癒されるのなら、力になりたい、側にいたい。
　出会った頃に抱いたその気持ちは変わっていなかった。
そうだ。
マァムは気付いた。
　彼に知ってほしいのだ。
　この世界を満たすものは、悲しみや憎しみばかりではない。
　この世界には、もっと、光や善意、愛がたくさんあって、それは貴方にも向けられているものなのだと。
　だから、彼女が彼に望むことは、ひとつしかなかった。
　マァムは、天上の星たちに答えた。

「彼に、生きてほしいの。
　そして、もっと、知ってほしいの。
　貴方が守ってくれたたくさんのものがあるって。
　貴方にも向けられている感謝も、愛情も、たくさんあるんだって。
　だから・・・生きてほしいの。」
　マァムのつぶやきに、空で何かが輝いた。
「あっ・・・。」
　マァムは、小さく声を上げげた。
　すっと、空を掃くように、星が一つ流れ落ちたのを見た。
　流星だった。
　それは、まるで、マァムのその決意を支えるかのように、天が応えた証のようであった。
　この夜、流れ落ちた流星のことを、マァムは、後年になるまでずっと記憶にとどめていた。

　マァムは、夜半、喉の渇きを覚え、目を覚ました。
　半分空けた窓からは、夏の夜風が寝室に入り込み、彼女のほてった体を冷ましてくれている。
　マァムは、視線を巡らせると、ふと、隣にあるはずの影がないことに気付き、慌てて半身を起こした。
　すでに大魔王との決戦から、数年。だが、ネイル村で共に暮らすようになって、まだ数か月。しかし、眠るとき、そのぬくもりが隣にあることが当たり前になっていた彼女は、その姿がないことに、言いようのない不安を覚えた。
　マァムは、下着姿のまま、ベッドから滑り降りた。そして、その剥き出しの肩に夏用のショールを羽織った。
　マァムは、彼の姿を探しに寝室を出た。

　マァムは、２階の寝室から１階のダイニングに降りてきたが、そこには明かりもなくひっそりとしていた。
　マァムは、キッチンの水がめから水を汲むと、コップに注ぎ、喉を潤した。汲み置きの水は、夏の暑さにぬるくなっていたが、渇き

を訴えていた体にはそれでも心地よかった。
　夏は、水も日持ちがしないから、また明日、井戸からくみ上げなければならないなとぼんやりと思いながら、マァムはダイニングの窓を見た。
　夏は、家の中に熱がこもりやすい。この夜も、換気のため、ダイニングの窓蓋は空いていて、その隙間から外が見えた。
　この家のダイニングの外には、ウッドデッキが作られていた。そして、ダイニングから続くウッドデッキに、人影が見えた。よく見ると、ダイニングの椅子も一つ、足りない。
　マァムは、ほっとした。
　そして、彼女は、そっと、ウッドデッキに続く扉を開け、外に出た。

　ウッドデッキにダイニングの椅子を出し、ヒュンケルは、そこに腰を下ろして、空を見上げていた。
　夜のネイル村は、星の明かりのみであり、そのわずかな光が、彼の銀髪を照らしていた。乏しい光の中、まるで彼の姿が宵闇に消えていってしまいそうなはかなさを感じ、マァムは心細くなった。
　ヒュンケルは、椅子の上に浅く腰掛け、背もたれに身を預け、椅子の上に寝そべるような恰好のまま、まっすぐに天に顔を向けていた。その横顔からは真剣な瞳がうかがわれ、寂しそうな、切なげな色を帯びていた。
　まるで、初めて出会った頃の彼のような、悲しみを感じさせる表情に、マァムは声もかけられず、その場に立ち尽くしていた。
　ヒュンケルは、物音に気付き、マァムに視線を向けた。そして、そこで、彼女が、不安げな表情を浮かべて佇んでいるのに気付いた。
「マァム。」
　彼が呼びかけると、マァムは、ようやく、安心したような顔をした。ほっと息を吐く。
「姿が見えなかったから、探しちゃった。」
　マァムの言葉に、いつもどおりの穏やかな色を浮かべ、ヒュンケルが応えた。

「すまない。不安にさせたな。」
　マァムはかぶりを振った。
「ううん、そんなことないわ。
夏の夜って、気持ちいいわね。
　何を見ているの？」
　すると、ヒュンケルは、先ほどと同じようにその面を天に向け、ぽつりと答えた。
「・・・空を見ていた。」
「空？」
「ああ。
　こっちへおいで。」
　そうして、彼はマァムに呼びかけた。
　マァムは、戸惑いながらも彼に近づいた。
　すると、ヒュンケルは、マァムの腕を取り、自分の膝の上にマァムを座らせて、背後から彼女の身体を抱きかかえた。
　マァムは戸惑った。彼女の頬が、朱に染まる。
「ヒュ、ヒュンケル？」
　だが、彼は構わず、指を空に向け、マァムに指し示した。
「見てごらん。」
　マァムは、ヒュンケルの指先を追った。すると、そこには、無数の星がきらめく、満天の星空が広がっていた。遮るものもない、夜空の宝石箱だった。
　マァムは、ほうと息を吐いた。そう言えば、近頃はあまり星を見ていなかった気がする。
　マァムは、背中のヒュンケルに語り掛けた。
「綺麗ね・・・星を見ていたの？」
「ああ・・・。」
　ヒュンケルはつぶやくように答えた。
　だが、マァムは、夜空を見上げていた、彼の寂し気な横顔が気になっていた。
　すると、天を見上げるマァムの目の前で、すっと星が空を横切った。
　マァムは声を上げた。

「え・・・流星？」
　空を見上げるマァムの目に、さらに星が落ちてくる。音もなく、瞬きする間に消えていくその星の光は、儚いものであったが、目を引く力強さもあった。
　西から一つ、星が流れる。
　すると、少し空いて、今度は南にも星が落ちる。
　次々と流れてくる星の波に、マァムは、感嘆の声を上げた。
「すごいわね。こんなに一度に星が降るなんて、私、見たことなかった・・・。」
　マァムの背後から、ヒュンケルの声が聞こえた。
「流星群というらしい。
　まだ先生と旅をしていた子どものころに、一度だけ、見たことがあった。」
ヒュンケルは、かつて、この地で、幼かった彼女とともにこの光景を見たことは口にしなかった。それは、幼すぎた彼女にとって、記憶の外の出来事だったからだ。
　マァムは、素直に感心したように、彼に問いかけた。
「素敵ね。これを見ていたの？」
「ああ。」
　だが、やはり、ヒュンケルの声は、どこか寂しさを帯びていた。
　何か思い出があるのかもしれない。
　マァムは、ヒュンケルの心の動きが気にはなったが、詮索はしなかった。代わりに、彼に寄り添うように、マァムは、彼女自身のことを語った。
「私もね、星は好きよ。なんだか見守ってもらっているみたいで。」
　すると、ヒュンケルは、おとうと弟子のことを口にした。
「以前、ポップが言っていたな。夜空を見ていたら死について考えて怖くなったと。」
　その話は、マァムも覚えていた。いつだったか、彼女たちのおとうと弟子が、そんなことを語っていた。
　マァムはうなずいた。
「そうだったわね。

でも、私は、父さんが亡くなっているせいかな。夜空が死者の国とつながっているって話を聞いたこともあったけど、そう思ったら、ますます見守ってもらっているみたいに感じたわ。」
　マァムは、夜空を見上げたまま、言葉をつづけた。彼女の視線の先では、変わらず、星々が強く瞬き、時折、その間を流星が通り過ぎていっていた。
　マァムは、ささやくように語った。
「前ね、私、すごく迷ったことがあったの。どうしていいのかわからなくなって、空を見上げて考えたわ。その日もこんな、晴れた夜空で、満天の星空だった。」
　何に迷っていたのか、マァムは語らなかった。それは、彼女自身の心に秘めた、彼女だけの大切な思い出だった。
「そのときにね、迷いながら、私がこうしたいって、思ったとき、すって星が流れたの。今晩みたいにたくさんの流星じゃなくて、たった一つだったけど、なんだか私の決めたことに、それでいいんだよって言ってもらったみたいで・・・嬉しかったわ。」
　マァムは、穏やかな声で、ヒュンケルに語り掛けた。
「だからね、流星って、天からのメッセージみたいだなって、思ったの。」
　ヒュンケルは、感心したように声を上げた。
「そうか・・・。そんな考え方もあるんだな。」
「ヒュンケルは違うの？」
　すると、どこか寂し気な彼の声が聞こえた。
「俺も、昔は星が好きだったのだろうな。」
「昔？」
　ヒュンケルは、ぽつり、ぽつりと言葉をつづけた。
「まだ地底魔城で、父と暮らしていたころ、父が何度か、夜空を見せに連れ出してくれたことがあった。」
　マァムは、その言葉にどきりとした。
　ヒュンケルが、自分からバルトスのことを語ることは少ない。だが、彼が亡き父のことを口に出すときには、いつも、大切な思い出や、重要な思考をそこに現わしていた。
　マァムは、聞き漏らすことがないように、じっと、ヒュンケルの

言葉に耳を傾けた。
　夏の夜空の下、ヒュンケルのよく通る低い声が響いた。
「父には、星空を見せてもらった。
　星の絵本を読んでもらったこともあった。
　だからなんだろうな。俺が父に何か贈ろうと思った時に、星の首飾りを作ったのは。」
　懐かしそうな、しかし、もの悲し気な声色だった。
「だから、どうしても、星を見ると父を思い出す。
　父を亡くしてからは、自分から空を見上げることもなかった。そんな余裕はなかった。
　空に星が輝いていることも、忘れてしまっていたんだな・・・。」
　マァムは、自分の胸元に回されていたヒュンケルの腕に手を添えた。ほんのりと、互いの温かさが伝わった。
　そのまま、しばらくの間、二人とも何も言わなかった。
　ただ、同じ夜空を見上げ、天から降る星々を眺めていた。
　しばらくの沈黙の後、ヒュンケルは、右手を上げると、東の空を指さした。
「マァム、以前、先生が言っていた。
　この流星群は、あの東にある、戦士の星から流れてくるのだと。」
「戦士の星？」
「ああ。東の低い空に、強く輝く星がいくつかあるだろう？あれが戦士の星だそうだ。」
「そうなの・・・。」
　マァムは、「戦士の星」という言葉に魅かれた。亡くなった彼女の父も戦士だったからだ。そんな星があるのかと思うと、どこか、嬉しい思いがした。
　ヒュンケルは、ぽつりとつぶやいた。
「以前、メルルが言っていた。アンデッドモンスターでも、暗黒闘気の生命体でも、意思があるのであれば、そこには魂があるのだと。」
　マァムは、黒髪の友の姿を思い浮かべた。

静謐な眼差しをした彼女の口から紡がれる真摯な言葉は、この世の真実を語っているように感じられたものだ。
　ヒュンケルは、言葉をつづけた。
「だから、お前の言うとおり、流星が天からのメッセージならば、戦士であった俺の父や、お前の父からのメッセージなのかもしれないな。」
　その言葉に、マァムは胸が温かくなるのを感じた。
　東の空に浮かぶ、強く輝く力強い星。
　その光が、亡き父の面影と重なった。周囲を明るくする、強い光を持った父だったから。
　マァムは、思い出の中の父の姿を追いかけ、自然に、目頭までもが熱くなるのを感じた。だが、そこには、寂しさも悲しさもなかった。ただ、温かさだけがあった。
　マァムはうなずいた。
「・・・うん。それなら、私もすごく嬉しい・・・。」
　背後から、ヒュンケルの声が響く。
「・・・父さん。心配をかけました。もう俺は大丈夫です。」
　それは、彼が自分自身に聞かせているような、亡き父に呼びかけているようなそんなつぶやきだった。マァムは、その言葉に感じ入った。
　そうして、マァムは、また空を見つめた。亡き父に想いを馳せ、ヒュンケルのつぶやきと同じ言葉を、彼女自身の父を思いながら、心の中でつぶやいた。
　その間も、マァムはヒュンケルに背中を預け、抱きかかえられたまま、そのぬくもりを感じていた。
　自分を抱きしめる彼の腕に、ほんの少し、力がこもったのをマァムは感じた。
　マァムは、そっと、目線を背後に向け、ヒュンケルの表情をうかがった。
　視線が合う。
　そして、どちらからともなく、二人は唇を重ねた。
　温かいぬくもりがお互いに流れ込む。

天からは、二人を見守るように、星が降り注いでいた。